



10代の山城さん

一方、沖縄や日本に対するアメリカ人の不満なども耳にしていました。母親について行くと、アメリカ人への悪口があり、父親について米軍基地に行くと日本への批判を聞かされました。

「自分とは何者なのか？」と悩みました。沖縄の母親を持った日本人である自分と、アメリカ人の父を持ったアメリカ人としての自分、どちらも悪いものが合わさった、すごく悪い者じゃないかと思ってしまう。

成長するに従って、自分の居場所を求めようになりました。日本人だけでなく全日本人ではない。アメリカ人とも言えるけど、完全なアメリカ人でもない。学校も、同じような境遇の子どもが多い学校だったので、「自分たちはハーフ」というアイデンティティーを持ち始めていました。でも、劣等感とか怒りとか処理できない気持ちがありました。ハーフの子には、まじめな子もいましたが、非行に走る子もいて、私自身はそういう子のほうに引かれていて、彼らと交わる機会が多くなりました。

思春期になり14、15歳になると、友だちとの家出から始まって、タバコを吸い

「どのような薬でしたか。」
タバコやアルコールの他、大麻などの薬を一通り全部やってみました。「スピード」という覚醒剤が一番人気がありました

お酒を飲み、ディスコ（クラブ）に通って、踊り明かしたり、彼女を作ってみたりと、自分勝手な生活を始めていました。

●薬物に手を染める

「薬物に手を染めたのは、その頃ですか？」
悪い友だちの中に、さらに悪いことをしている子がいました。仲間意識を高めるために、そこに薬を持ってくるんです。みんなおもしろおかしく興味本位で薬を始めてしまったんです。

「その後、どのようになっていきましたか。その時の気持ちはいかがでしたか？」
人は誰でも、自分の居場所を求めています。私も、「その日その日楽しければいいや」という軽い気持ちでいました。そうすると、学校にも行けなくなり、中退して楽しみを中心とする生活になりました。ドラッグも最初は仲間うちで1か月に1回パーティーをするだけだったのが、周期がどんどん短くなって、1週間に1回になり、それが毎日になって、最終的には1日に何度もするようになっていきました。それからの13年間は、薬漬けの人生になってしまいました。

薬をしていない時は、警察に捕まったり、病院に入院したりをくり返していました。

「月1回でも通って、あとは元の生活に戻ればいいや」という気持ちで、母親

「1依存症から抜け出すためにしたこと、させられたことはありましたか？」
自分から選んだ生活ですが、すごくむなしいです。警察に捕まるたびに、「もう2度としまい」と思いながら、出てくるや否や薬を手に入れて使ってしまう。誰からも怖がられたりいやがられたりして、家族とは、ほぼ絶縁状態でした。

「自分ではどうしようもない」というあきらめもあり、「生きていても価値がない」といううつ状態にもなりました。自殺願望も芽生えましたが、その気にもなれません。警察と病院を行き来する悪循環に陥りましたが、そこからの抜け出し方が分かりませんでした。

●脱出のきっかけ

幸い、母親がクリスチャンで、私が薬を始める前から教会に行っていました。私も連れられて何度か行ったことはありましたが、そこに助けを求めることはありませんでした。

ある時、また警察に捕まり、執行猶予で出てくる時に、それまで一度も条件を出すことなかった母親が、身元引き受け人になる条件として、「とにかく教会に行ってほしい」と言いました。

私は、「執行猶予で出られるなら、何でもいから頼む」という形で、出してもらいました。

「どのように信仰を持たれましたか？」
手続きが済んでハワイに出かけること

「1依存症から抜け出すためにしたこと、させられたことはありましたか？」
自分から選んだ生活ですが、すごくむなしいです。警察に捕まるたびに、「もう2度としまい」と思いながら、出てくるや否や薬を手に入れて使ってしまう。誰からも怖がられたりいやがられたりして、家族とは、ほぼ絶縁状態でした。

「自分ではどうしようもない」というあきらめもあり、「生きていても価値がない」といううつ状態にもなりました。自殺願望も芽生えましたが、その気にもなれません。警察と病院を行き来する悪循環に陥りましたが、そこからの抜け出し方が分かりませんでした。

●脱出のきっかけ

幸い、母親がクリスチャンで、私が薬を始める前から教会に行っていました。私も連れられて何度か行ったことはありましたが、そこに助けを求めることはありませんでした。

ある時、また警察に捕まり、執行猶予で出てくる時に、それまで一度も条件を出すことなかった母親が、身元引き受け人になる条件として、「とにかく教会に行ってほしい」と言いました。

私は、「執行猶予で出られるなら、何でもいから頼む」という形で、出してもらいました。

「どのように信仰を持たれましたか？」

ティーンチャレンジ・ジャパン

薬物依存との戦い

山城テモテさんインタビュー



この夏、大物タレント夫婦が覚せい剤使用疑惑で逮捕というニュースが日本中を揺るがせました。しかし、薬物に依存しているのは、決して芸能人だけではありません。一般社会に様々な薬物が浸透しているのです。そして、そこから抜け出したいと願っている人も大勢います。

沖縄県南部に、「ティーンチャレンジ・インターナショナル・ジャパン（以下



「さつそくですが、ティーンチャレンジは、どのような働きをされていますか？」
麻薬・アルコール・その他の依存症で苦しんでいる方々に、それを克服するために必要なサポートを提供する働きです。クリスチャンによる依存症からの更生施設、リハビリ施設があります。

「関わる方々はどのくらいいて、施設はどのくらいありますか？」
理事として、アッセンブリー教団、また単立の教会の先生方に加わっていただいております。本部は、東京の八王子にあり、ディレクターの木崎智之先生（牧師）が本部を取り仕切っています。センターとしての更生施設は沖縄にあって、私が所長をしています。

「1依存症から抜け出すためにしたこと、させられたことはありましたか？」
自分から選んだ生活ですが、すごくむなしいです。警察に捕まるたびに、「もう2度としまい」と思いながら、出てくるや否や薬を手に入れて使ってしまう。誰からも怖がられたりいやがられたりして、家族とは、ほぼ絶縁状態でした。

「自分ではどうしようもない」というあきらめもあり、「生きていても価値がない」といううつ状態にもなりました。自殺願望も芽生えましたが、その気にもなれません。警察と病院を行き来する悪循環に陥りましたが、そこからの抜け出し方が分かりませんでした。

●脱出のきっかけ

幸い、母親がクリスチャンで、私が薬を始める前から教会に行っていました。私も連れられて何度か行ったことはありましたが、そこに助けを求めることはありませんでした。

ある時、また警察に捕まり、執行猶予で出てくる時に、それまで一度も条件を出すことなかった母親が、身元引き受け人になる条件として、「とにかく教会に行ってほしい」と言いました。

私は、「執行猶予で出られるなら、何でもいから頼む」という形で、出してもらいました。

「どのように信仰を持たれましたか？」

●ハーフとして育つ

「山城さんご自身のここに移りますが、沖縄生まれで、山城テモテというお名前ですが、ハーフでいらっしゃいますか？」
はい。アメリカ人の父親と沖縄県民の母親の間に生まれました。

「年齢は？」
39歳になりました。

「家族構成についても教えていただけますか。ご兄弟はいらっしゃいますか？」
私は、父母の長男で、下に弟が2人います。現在は、妻と息子（21歳）との3人家族です。

「どのような環境で育ちましたか？」
生まれ

「たのほは」
1970年、沖縄はまだ本土に復帰していませんでした。

「父は、元アメリカ軍人、母親と恋に落ち、結婚し、子どもを3人もうけ、私は何の不自由もなく育って、いました。」

「小さいうちから、英語と日本語を聞き分けることができ、そのために、アメリカ人に対する日本人からの批判を聞

になり、牧師先生方が空港でお祈りしてくれて、お別れする時にも、「ちょっと待って下さい」とトイレに駆け込んで、隠し持っていた大量の薬物を投与するような自分でした。薬物は、人間を人間ではなくするようなものです。

1998年のことです。ハワイに着いた次の日に、薬物の過剰投与のため入院しました。心拍停止という状態から、私の回復は始まりませんでした。

ティーンチャレンジでは、聖書が土台であり、祈り、賛美、教会の出席などを教えられました。そこで半年間生活する中で、あるみことばに直面しました。

コリント人への手紙第二5章17節です。ティーン・チャレンジのテーマ聖句でもあります。

「だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました」

これを読んだとき、心からイエスさまにお祈りしました。

「本当にイエスさまがいるなら、ここにあるようにどうか私を変えてほしい、変わりたい、でも変わり方が分からない」泣いて祈りました。

実は禁断症状もありまして、呼吸停止も2回くり返し、心拍停止で入院をしました。ティーンチャレンジの多くの兄弟たちが私のために祈り、牧師先生たちも私のところに来て回復のために祈ってくださったことを覚えていています。

ひとり問題が異なりますので、それぞれに合ったプログラムを考えて取り組んでいます。

ティーンチャレンジとしてのカリキュラムが、朝昼晩に1時間ずつもうけてあり、その合間に、生徒の持っている特別な感情の問題、うつだったり怒りだったりをコントロールすること、または男性の特有の問題があったりしたら、それに合ったカリキュラムを組んで実践していきます。

■現在、生徒さんは何人いますか。

一番多かった時は10人で、今は2人です。生徒期間は1年です。聖書の実践と適用をティーンチャレンジの方針としています。プログラムは完成度が高くて、一人ひとりでそれほど違ったものではありません。

●入所の条件は

■入所の条件は何ですか。信仰は持っていないでもいいのですか。

条件は「更生したい人」ですが、はじめから自分の意志で来る人は、まずいいですね。私もそうでしたが、最初のコインタクトは、親だったり、教会に通っている方なら牧師先生からだったりします。身内の希望で来る子が多いです。

今私の右腕になっている子は、生徒として来て、私と1対1で学び、卒業をし、インターンシップを終え、「ティーンチャレンジの働きをしたい」ということで、残っています。今年の2月と5月に生

そこで初めて、主イエス・キリストを救い主と認め、私の心に受け入れる祈りをしたことを今でも覚えています。

以前教会には通っていましたが、先生のメッセージ、兄弟姉妹の交わりをうらやましがらるだけで、聖書の話も知識だけにとどまっていた。ハワイのティーンチャレンジに行つて半年後、「あの時先生が語っていたキリストのメッセージとは、こういうことだったんだ」と心から受け入れて信じました。それが、私の救いの時でした。

●スタッフになる

■山城さんは、どのようにしてスタッフになりましたか？

「生徒期間」の1年間を終えて、「インターンシップ」も1年受けました。その頃のティーンチャレンジでは、スタッフ訓練の枠組みができて始めて、「自分もその訓練を受けたい、ハワイ以外の場所にも行ってみたい」と思いました。

シカゴにあった「スタッフ訓練養成所」に行かせてもらいました。2000年に卒業し、沖縄に帰りました。私と同じような「ハーフ軍団」の中には、まだまだ薬で人生をダメにしている子がいることを知っていたので、何らかの助けになりたいと思ひ、その時を待っていました。

フリーターをし、バイトをし、会社にも就職しました。当時同じ教会に通っていた姉妹と結婚もしました。妻の仕事の関係で石垣島に行くことになり、石垣島

の教会の牧師先生から1対1で2年間の訓練を受けました。

私は当時ヤク中の青年を3名くらい抱えており、どうにかしたいと祈り続けていました。

その頃、「ティーンチャレンジが日本にきている」という情報を得て、すぐにディレクターの木崎牧師に電話をして、「実は、ヤク中の青年が3人いるんですが、引き受けてもらえませんか」と聞くと、「実は、まだセンターはできていない」ということでした。

ショックでした。私自身がセンターで更生したものですから、「ティーンチャレンジ」と言うからには、センターがなければならぬ」という思い込みのようなものがありました。



▲砂浜で学ぶ生徒たち



◀沖縄の更正センター



木崎 (エグゼクティブ・ディレクター)

あなたがティーンチャレンジの卒業生だと言ってみたら」と言われ、それでも気乗りしないでしたら、妻が連絡をとりました。

すると、木崎先生から電話をいただき、「ティーンチャレンジの将来のために、あなたと会ってみたい」ということで、会うことになりました。会うと同時に、木崎先生に認められて「スタッフになつてもらえませんか」と聞かれて、これこそ神さまからの使命と感じました。2004年暮れから05年のことです。沖縄の更生センターは、2006年11月に始まりました。そこから本格的にスタッフとしていっしょに働き始めました。

■沖縄更正センターの所長とは、どのようなお仕事ですか？

ここは、24時間の住み込みで、来る生徒たちも、ここで1年間過ごすことになっています。

依存症と言っても、アルコールだったり麻薬だったりギャンブルだったり、様々な依存症と生徒一人

徒期間を終えた人たちが2人いて、今インターンとしてがんばっています。訓練を受けながら、更生した者として後輩たちを導くのが、プログラムの一環となっています。

■例えば「自分の息子や娘にティーンチャレンジに行つてほしい」という親御さんがいた場合、どうすることを勧めますか。

残念ながら、女性センターはないので、センターで受け入れるのは男性に限られます。

本部のほうでしたら、木崎牧師と連絡を取っていただき、何回か面接をしていただきます。家族会議を開いたりします。そして何より、本人に自覚を持ってもらいます。「ティーンチャレンジに来るには、どういうことを覚悟しなくてはいいかないか」ということなどの了解を取り、契約書を交わしてから来てもらいます。

親や本人がクリスチャンでなければならぬことはありません。実際、2月に生徒期間を終了した方は、親も未信者でしたが、祈りも賛美もしたことのない青年でしたが、立派に更生しました。

■今の若者に伝えたいことは、どのようなことですか？

今の子どもたちを見てみると、さびしさや孤独感をまぎらわすために、いろいろなことを興味本位でしているんですね。大変な時代を生きていると思えます。その中でも、自分自身を信じてほしい。自分をあきらめないでほしい。希望

を持つてほしい。状況や環境に流されずに、自分のあるべき姿を描いてそれを持つち続けてほしいと思います。

■最後に、これからのビジョンをお知らせください。

生徒たちが、一人ひとり社会復帰に向けて、キリスト者としての歩みはどういうものかを、しっかりとふまえてほしいと思います。また、今はセンターが沖縄にしかないですが、困っている地域はあちこちにあるので、「ティーンチャレンジ」をしてみたいという教会などが起こされて、協力的体制を整えていきたいと思っています。岡山でもすでに土地がさげられており、更生センターが建設されることを祈っています。

■ありがとうございます。これからの働きに期待しています。

1958年にアメリカの青年牧師ディヴィッド・ウィルカーソンがニューヨークのギャング団に神の愛を伝える中で、麻薬やアルコールの虜になっている少年少女を助けるために24時間体制のセンターを始めました。悪い人間関係や誘惑から守られた環境で、スタッフとともに聖書に基づいた共同生活を送る中で数え切れないほどの青少年が依存症から解放され、社会に貢献できる人間に変えられていったのです。

ティーンチャレンジ誕生のストーリー、「十字架と飛び出しナイフ」はパット・ブーン主演で映画化されました。ビデオ・DVDは全国のキリスト教書店で好評発売中。

1970年代にはアメリカの大学がティーンチャレンジを研究調査し、卒業生の86%が卒業5年後も「クリーン」(麻薬、お酒、タバコに一切手を出していない)であったという事実が発見されました。現在では共産圏やイスラム圏を含む世界90カ国で500以上の更生センターを運営しています。(ホームページより)

ティーンチャレンジ・インターナショナル・ジャパン
沖縄更正センター
＜連絡先＞
〒901-2424 沖縄県中頭郡中城村南上原 191-2
オレンジハウス 303 ☎090-5478-7300 (山城テモテ)



長男の晶さん (21) と妻 希さん